

# 突発性難聴 聴力回復のカギ 早期の治療開始が



年間3万5千人が発症するとされる「突発性難聴」。これといった原因やきっかけもなく、あるとき突然、音が聞こえなくなる病気で、発症後3日以内に治療を開始することが聴力を回復するカギといわれ、時間がたつほど回復が難しくなります。難聴の程度はさまざまですが、聞こえに異常を感じたら、時をおかずに耳鼻科を受診してください。



## 音が伝わるルートに問題が起きると

耳の構造は大きく「外耳」「中耳」「内耳」に分けられます(図)。

「音」の正体は、空気の振動(音波)です。私たちのまわりの空気の振動は、まず耳介で集められ、外耳道を通じて外耳と中耳の境にある鼓膜を振動させます。振動はさらに、鼓膜に続く耳小骨(ツチ骨、キヌタ骨、アブミ骨)で増幅され、内耳に伝えられます。そして、内耳の蝸牛で振動は電気信号

号に変えられ、神経を介して脳に伝わります。ここで初めて私たちは音を認識する(音が聞こえる)のです。

この音の経路のどこかに問題が起きると、聞こえがわるくなります。これが**難聴(聴覚障害)**です。

音を振動として伝える外耳と中耳は「伝音系」と呼ばれ、何らかの原因で振動が十分に伝わらず、聞こえがわるくなる場合を**伝音性難聴**といいます。

内耳から先は、電気信号に変えられた振動を音として感知・認識するため「感音系」と呼ばれ、内耳、聴神経、

脳に原因があつて起きる難聴を**感音性難聴**と呼びます。

伝音系と感音系の両方に原因のある**混合性難聴**もあります。

なお、内耳には、体の平衡感覚を司るといふ重要な働きもあり、三半規管や前庭がこの役割を果たしています。



## 原因不明の突然の難聴 耳鳴りやめまいの症状も

突発性難聴は、感音性難聴のひとつで、前触れもなしに、ある日突然、聞こえがわるくなります。ほとんどは片側の耳だけに発症します。

まったく聞こえなかつたり、極端に聴力が低下する高度の難聴になることが多いのですが、低い音または高い音だけが聞こえないという人もいます。

なんとなく聞こえづらい程度の場合、難聴が起きていることに気づかず、治療が遅れてしまうこともあります。

また、難聴に耳鳴りや耳閉感(耳が詰まった感じ)、めまい、吐き気を伴うこともあります。

原因としてウイルス感染や内耳の血

## 監修



医療法人財団神尾記念病院  
耳鼻咽喉科専門医  
田中 健 先生  
(たなか・たけし)

## ●略歴

1997年、福井医科大学医学部卒業、同附属病院耳鼻咽喉科入局。1999年、福井赤十字病院、2001年、大阪労働衛生センター第一病院勤務を経て、2002年、福井医科大学医学部附属病院耳鼻咽喉科医員。(2003年、旧福井大学と旧福井医科大学が統合。)2006年、福井大学大学院医学系研究科卒業。2008年から神尾記念病院勤務。医学博士。



## 良好な聴力回復のために 発症後3日以内に受診

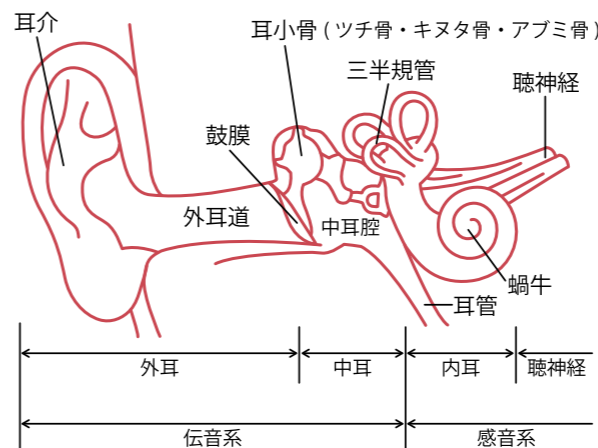
「何月何日何時頃」に発症したと覚えていられるほどの突然の難聴であれば診断は容易ですが、聴力検査、耳のX線検査などで難聴の程度や、他の疾患の可能性などを確認します。

突発性難聴は、時間がたつほど症状(難聴)が固定し、聴力の回復が困難になってしまいますので、一刻も早く治療を開始する必要があります。**発症後3日以内**であれば良好な聴力を回復できるとされています。

ちよつとした「聞こえ」の異常でも、時をおかずに耳鼻科を受診して調べてもらうことが重要なポイントです。

治療では、まず安静が必要です。難聴が軽度であれば、ステロイド薬を1〜2週間服用します。重度の場合は入院して、ステロイド薬に循環改善薬、血管拡張薬、代謝賦活薬などを組み合

図 耳のしくみ



わせて点滴治療を行います。

そのほか、注射針を鼓膜に刺して中耳から内耳に直接ステロイド薬を送り込む「ステロイド鼓室注入法」、血液循環の改善を目的に高濃度の酸素を投与する「高圧酸素療法」、頸部の交感神経に局所麻酔をして血管を拡張させる「星状神経節ブロック」などの特殊な治療法もあります。

突発性難聴は、ストレスが発症の引き金になるともいわれています。日頃から疲労やストレスをためない生活を心がけましょう。



突然、聞こえがわるくなったら「3日以内に病院へ」と覚えておきましょう